

## 1996 年度学会賞受賞作品・授賞理由

---

### ◆石川賞『歴史の街づくりを実現した歴史的地区環境整備街路事業』制度の創設と推進

矢島 隆(建設省都市局 代表 技術審議官)

〈選考理由〉

「伝統的建造物群保存地区」に加えて、沿道の環境整備事業ともいべき「歴史的地区環境整備街路事業」が昭和 57 年度より創設され、歴史的町並みの保存と居住環境の改善とが都市基盤整備を通じて一体的に実現されるようになった。

「歴史的地区環境整備街路事業」は、次の諸点において、次代の都市計画のあり方に新しい視点と方法をひらいている。

第1に、都市計画決定道路において「街路単独」から「環境文脈」判断のもとに最適解を導く柔軟な計画・実施の筋道を開いた。

第2に、地区単位の歴史的ストックの保全・再創造を、「伝統的建造物群保全地区」の事業との連携において具体化した。

第3に、地区住民のための居住環境整備を促し、観光目的だけでなく、生活目的の環境改善が持続的に行われている。

第4に、「伝建地区」に関連する 28 地区を含む 58 地区で事業実施、もしくは計画策定が行われた各地区において、地域資源活用に誇りと自信をもつてのぞむ創造的まちづくりへの気運を高めた。

第5に、最も進んでいる地区(檀原市今井町)では、子どもたちのまちづくり学習の現場を生みだし、都市計画と学校教育の接点を導きだしつつある。

このような意義深い事業を進めるにあたって、中心的役割を果たした矢島隆氏の発想、及びその努力は特に大であり、「歴史の街づくりを実現した歴史的地区環境整備街路事業」制度の創設とその推進は、わが国の都市計画発展に高い貢献を果たすものと判断し、石川賞にふさわしいと評価された。

## ◆計画設計賞帯広市の駅周辺拠点整備

高橋 幹夫(帯広市代表 市長)

〈選考理由〉

都心の活性化は、我が国の多くの地方都市において今日的重要課題となっている。帯広市においても、開拓によるグリッド状の道路網と土地的制約の少なさのため、都市の平板的な外延化が進展し、一方において都心のコアの強化育成が求められている。

このような状況の中で、帯広市においては、帯広駅を中心とした鉄道の連続立体交差の事業化を契機に、各種の都市計画事業等を展開し、都心部を再整備して活性化を図ろうとしている。

即ち、帯広駅の高架化にあわせて駅前広場と街路を再編成し、駐車場やバスターミナルを配置し、駅周辺の交通のアクセシビリティを高めるとともに快適な歩行者空間を確保し、同時に土地利用の高度化のため、街区の再編成等を行うものである。

都市計画として主たるものは、都市計画道路、連続立体交差及び土地区画整理の、いわゆる3点セットを同時に計画決定し、それぞれの事業化を図ったものであるが、土地区画整理については、一部に以前の土地区画整理済み地を含んでいる。

すでに、連続立体交差事業は完成し、土地区画整理事業は進行中であるが、公的施設の立地や修景のための事業も同時に実施されており、徐々に事業の効果が発現しつつある。

これらの総合的な都市計画の立案と各種事業の展開は、計画設計賞に値するものと判断された。

## ◆論文賞都市の土地利用の計画制度と計画技術の展開過程 —規制誘導と計画協議—

水口 俊典((株)都市環境研究所代表)

〈選考理由〉

本論文は都市計画学の中心的研究テーマの一つである土地利用計画について、計画制度と計画技術の画面からアプローチしたものであり、以下に述べるような独自の研究成果をあげていると考える。

第1に本研究は計画づくりから制度づくりまでの一貫した経験を生かし、広い意味での制度づくりへの研究者としての関与のおり方を実践的に示しており、計画制度研究に新しい視点を加えたことである。

第2に第1の点と関連する計画づくりと制度づくりの両面の経験から計画制度と計画技術の関係を明らかにし、計画制度の運用の過程から手続きの中に組み込まれる計画技術のあり方を示し、それは計画制度面から見ると参加に関わる協議と合意の過程に深く関わることを示していることである。

第3に昭和60年代から現在まで、わが国の都市の大きな変化に伴う土地利用制度のあり方の変化をレビューし、成長都市の時代の計画制度から成熟都市の時代の計画制度への変化を具体的かつ体系的に検討していることである。

以上、本論文は都市計画の制度が大きな変革期にある現在、都市計画学研究の面から寄与できる計画制度研究のあり方を示したものとして評価でき、論文賞に値すると判断された。

## ◆石川奨励賞子どもの遊びの視点からのまちづくり意識の啓発

木下 勇(千葉大学園芸学部助教授)

〈選考理由〉

地域の整備を計画し実践する過程で、住民の参画をはかることはもはや常識化されており、近年、状況に応じた様々な手法の開発や事例の報告、それらの評価分析等がなされてきている。

受賞者は1980年代初めから、これら「まちづくりへの参加」の実践と理論化に取り組み、多くの成果を挙げてきたが、一貫して子どもを中心とした「遊び」を切り口としていることが特徴で、この点が特に評価されるところである。例えば初期の成果としての、世田谷区太子堂地区における三世代の遊び場マップの作成は大きな反響を呼び起こした。

1996年出版の著書「遊びと街のエコロジー」はその後の実践と研究の成果の中間的とりまとめとされようが、遊び場マップの作成から始まり、オリエンテーリング、ガリバーマップ等のいわゆるワークショップの技術をはじめ、ボンネルフ、冒険遊び場、さらには「庭木・街路樹など実がなる木や菜園のあるまち」の概念化である「エディブル・ランドスケープ」等が実践的な経験を交えて論じられている。

同書からも分かるように、受賞者は一連の研究と実践活動において独自の視点を維持しつつ着実な成果を挙げた。さらに継続的な活動が期待されるところであるが、これまでの成果は十分に石川奨励賞に値するものと評価された。

## ◆論文奨励賞都心地区区分に対応した居住機能誘導手法の体系的運用に関する考察

小泉 秀樹(東京大学大学院工学系研究科講師)

〈選考理由〉

本論文は1980年代以降の東京都心地域に着眼して、アクセシビリティ、業務・住宅需要の地理的分布などをもとに対象地域を14に地区区分し、その内の9地区について居住利用に関する市街地実態を丹念に調査している。そして、誘導手法を検討する4つの視点として、広域性、地区への貢献、住宅性能、統合性を導いている。ついで、総合設計制度、地区計画制度など、都心区で適用されてきた居住機能誘導手法の効果や実績を追跡することで、その可能性と限界を検証し、新たに必要と考えられる制度枠組みを提案している。

本論文は、誘導概念の構成や都心居住の要因など、研究の理論的な面、また、論旨の展開や結論の導出に論証性の点で厳密さに欠ける点も見られるが、全体として、現在盛んに行われている都心居住政策に実態調査の面から重要な示唆を与える点で実用性が評価できるほか、誘導手法の系統的分析にも新規性が認められる。著者の研究テーマとして将来性、発展性にも期待できるものとして、本論文を論文奨励賞に値すると判定された。

### ◆論文奨励賞都市計画マスタープランにおける都市計画と居住政策の連携に関する研究－東京とロンドンの都心居住に着目して

村木 美貴(東京工業大学大学院社会理工学研究科助手)

#### 〈選考理由〉

本論文は、特に都心居住との関連で「都市計画と住宅政策の連携」の観点から、都市計画マスタープランと住宅政策(住宅マスタープラン)との関係を追求めた論文である。同時に、日本(事例としては、東京都心区)とイギリス(同、ロンドン都心区)の法制度の建前及び運用実態を分析した比較研究となっている。

すなわち、「都心居住の確保」をキーワードに、日本とイギリス、さらに、東京都心区とロンドン都心区の比較をおののの行い、まとめとして、都市マスタープランにおける都市計画・居住政策の連携を論じている。

全体として、対象テーマの取り扱いが体系的かつ包括的であり、論文としての構成が明解で、まとまりもよい。内容的には、豊富な現地調査による具体的事例に基づき、綿密な実証的分析をおこない、説得力ある議論を展開している。

比較都市計画研究の点では、更なる理論的深化が望まれるが、都市計画マスタープランと住宅マスタープランの展開が望まれる現在、時機を得たテーマに関して、示唆に富んだ成果を得ており、論文奨励賞に値すると判断された。

### ◆論文奨励賞交通機関の移動時間短縮効果に関する理論的研究

三浦 英俊(日本学術振興会特別研究員)

#### 《選考理由》

本研究では、平面土で移動する交通を、2次元空間の2点間の移動の概念ではなく、4次元空間の点と表現し、これを「移動を表わす4次元空間」とすることが、移動の効果の大きさを解析的に議論するには有効な概念であることを明らかにした。

すなわち、ここでは、2次元空間に鉄道と徒歩しか交通機関がないことと仮定し、しかも、2点間の所要時間が早いときには、その交通手段を利用すると仮定する。また、2地点間の移動頻度は、4次元区間では密度関数で表現することが可能であり、4次元空間の点に移動時間の重みをつけることにより、線移動量及び総所要時間が4次元の積分値で表わすことが可能になる。これを利用し、鉄道に関する計画変量(路線の位置、路線長、移動速度等)が移動に与える効果を直接定式化でき、また厳密に計測することが可能であることを示した。

また、動きの方向を与えると効果が変わることを利用し、東京の地下鉄鋼のうち、どの移動方向にこの地下鉄鋼が効果があるかを計測することにより、現鉄道網に追加すべき路線としてどのようなものがあるかを示すことができ、本研究の応用の可能性を示した。

本論文は、理論を重視しているので、実用面からみると、やや課題が残るが、都市解析の分野で、積分幾何学が都市計画に有用な成果あるいは新しい解釈を与えるものであることを示した。

よって、論文奨励賞に値するものと認められた。